

習近平による軍の完全支配と“中央軍事委員会聯合作戦指揮センター”の設立 漢和防務評論 20140902(抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

中国中央軍事委員会主席習近平は、就任以来、軍との良好な関係を積極的に求めつつ、最高級軍人の汚職摘発など思い切った体制改革を進めているように見えます。また一方中央軍事委員会に聯合作戦指揮センターを設立し、軍に対する指揮権を強化しようとしています。さらに武装警察隊の軍隊色を強め、中央軍事委員会が直接指揮できるよう組織改編を狙っているとのこと。習近平の統率が成功し改革がうまくゆくのか、政治と経済はバランスがとれるのか、先行きは不透明ですが、習近平による軍の完全支配が進められているようです。漢和防務評論ネット版に関連記事がありましたので紹介します。

KDR 平可夫報道：

中国軍の権威ある消息筋は KDR に次のように述べた：中共は、最高戦略策定レベルに“中央軍事委員会聯合指揮センター”を設立した。指揮センターは総参謀部作戦部に置かれる、と。

総参謀部は、北京の西山にあり、全て地下式で山をくり抜いて造られている。衛星写真を見ると、地下への若干の出入口がある。最近できた出入口は西郊飛行場に接続している。

同消息筋によると：習近平は“軍隊を熱愛”し、軍に対し“自分が如何に軍を理解しているか”を分かって貰えるようひたすら努力しているという。“習近平は何度も中央軍事委員会聯合作戦指揮センターを訪れ、2013年に举行された”行動使命-2013“演習においては作戦計画を自ら審査した。同演習ではテレビ会議方式で軍事委員会を指導した。演習参加部隊の総機動距離は3万キロに達した。同消息筋はこのように強調した。中国軍がこの情報を公表したということは、中国の最高戦略策定レベルに聯合作戦における指揮体系が確立されたことを意味する。

KDR は、この組織が有効に機能するかどうか疑問を感じている。その理由は以下の通り。

同消息筋が公表した内容から判断すると、中央軍事委員会聯合作戦指揮センタ

一が総参謀部作戦部に位置するということは、いわば総参謀部作戦室であり、かつ軍事委員会聯合作戦指揮作戦室である。

しかも中国の総参謀部は米国のような統合参謀本部ではない。陸軍司令部を設立しないので、総参謀部が事実上の陸軍司令部となる。多数の作戦部員は陸軍出身で部長も陸軍出身であるが交替制ではない。第 12、13、14 総参謀部作戦部長は、**Qi Jianguo**、**Bai Jianjun**、**Roa Kaixun** であり、全て陸軍出身の少将クラスである。通常は集団軍軍長経験者である。

真の意味で聯合を図るため、近年来、作戦副部長の職位の改革が行われた。過去は全て大佐クラスの陸軍軍人であった。現在はその他の軍種が増えている。たとえば、**Jian Guolin** 大佐は、海軍潜水艦部隊出身である。元副部長の **Ma Jian** は空軍出身であった。総参謀部作戦部全体の機構を見ると、依然として陸軍主導であり、如何に“聯合”を達成するのだろうか。真の聯合とは、各軍兵種が平等であり、最高の主管機構は軍種の首脳が聯合して担任すべきである。

上述情報は、習近平が江澤民、胡錦濤に比べ軍を重視していることを確かに示している。同消息筋の胡錦濤に対する評価は極めて低かった。彼は軍隊内部で威光が全くなく、作戦部を訪れることは極めて少なかった。軍令方面の郭伯雄及び軍政（人事）方面の徐才厚は胡錦濤に直接報告したことはなかった。米国は胡錦濤が **J-20** 型ステルス機の初試験飛行の実施を知らなかったことに驚いた。（注：胡錦濤は軍から報告を受けていなかった疑いがある）

周知の通り、江澤民は、自己の利益集団の一員である郭伯雄及び徐才厚を中央軍事委員会に送りこみ、この 2 人を通じて軍を遠隔操作した。

習近平にとっては、汚職の元凶である徐才厚及び郭伯雄を処断する前に、まず軍を掌握しておかねばならない。習は、2012 年 11 月 15 日に中共中央総書記、中央軍事委員会主席に就任してから、2013 年 12 月末までの 400 余日間に、39 日間を利用し 14 回の国内視察を行い、中国全土の 3 分の 1 以上の省、自治区、直轄市、及び 7 大軍区を視察した。彼はこれを金正恩から学習した。

ロイター社のジョーク報道によると、鄧小平が後任者に権力移譲した際、次の言葉を残したと言う。”毎週 5 日間仕事をするとして、少なくとも 4 日は軍の将領たちと一緒に過ごすべきである”と。習近平は、鄧小平のこの言葉を心に刻み込んだ。彼は、就任後の最初の視察に南部の広東省を選び、そこに 5 日間滞

在、そのうち 3 日間は広東軍区を視察した。

中国科学院—清華大学国情研究センター主任の胡鞍鋼は、次のように指摘した：軍を統卒するため、習近平は中央軍事委員会主席として全国を 14 回視察すると同時に解放軍及び軍の院校並びに武警部隊を 9 回視察した。足跡は 7 大軍区に及び、その間、8 回「目標は強軍」であること及び「任務達成能力の向上」を明確に強調した。胡鞍鋼は論文上で、” 2012 年 12 月、習近平は広州軍区視察中に「中国の夢」に引き続き初めて「強軍の夢」を提議した” と述べた。

2013 年 12 月 28 日の新華網報道によると、2013 年、中共総書記習近平は、軍を 11 回視察した。習近平が何度も軍を視察する目的は、軍を掌握するためである。2013 年 11 月 18 日、解放軍の「全軍軍事闘争後勤（注：後方）準備工作会議」が北京で開催された際に、習近平は北京の京西賓館で参加代表に接見した。その時再び” 軍事闘争準備” を指示した。

2013 年 11 月 6 日、習近平は北京で全軍党の建設工作会議代表に接見した。習近平は次のように強調した：中国軍は「党の政治任務を執行する武装集団」であり、終始「党の軍に対する絶対的指導を堅持し、終始戦いに勝つことを根本的着眼点とする」と。三中全会（中国共産党第 18 期中央委員会第 3 回全体会議は 11 月 9-12 日に北京で開催）の前に軍側の代表たちと密接に会見した真の理由は、軍人の心を掴むためであった。

2013 年 8 月末、習近平は、瀋陽軍区機関において、瀋陽に所在する師団以上の部隊の幹部と接見した。毛沢東も鄧小平も師団級部隊の幹部と接見したことはない。ただ鄧小平は、六四（天安門事件）の重要時期に” 戒厳部隊” の軍級幹部に接見したことはある。習近平よりも上を行くのが金正恩である。彼は全軍の連隊以上の幹部と接見した。数万人が平壤に集まったと言うがこれは彼の年齢のせいである。

つまり二人の策略は、同じであり軍を掌握することにある。いわゆる先軍政治である。

現在軍事委員会副主席の許其亮は軍の代弁者である。二人が知り合ったのは福建省の空 8 軍時代と思われる。上述の権威ある軍の消息筋は、KDR に次のように述べた：軍事委員会副主席の許其亮は、軍の人事を所掌しており当時の徐才厚の立場にある。彼の画策の下、軍内部に” 習家軍” が誕生し巨大化しつつあ

る、と。

許其亮は西安、ウルムチで駐屯部隊の規律維持を指導する際、頻繁に”習近平講話の精神を学習、徹底させることが当面の重要な任務である”と提言していた。許其亮と範長龍は、様々な機会及び解放軍報等の媒体を通じ、何度も習近平の指示に従う姿勢を見せていた。両者を比較すれば、許其亮の方がその姿勢を見せる頻度が多かった。

空軍出身の許其亮は、1990年から1999年の9年間、ひたすら福建省で補任され昇進した。しかしこの時期、習近平は、すでに福建省で5年の勤務を果たし福州市党委員会書記兼福州市軍区党委員会第一書記から省党委員会副書記兼省高射砲予備役師団第一政治委員に昇進した。その上、習近平は早い時期に中央軍事委員会事務局秘書をやっており、この間、2人は仕事を通じて自然に親密な関係になったと思われる。したがって中共十八大において、空軍出身の許其亮が慣例を打破し、中央軍事委員会副主席の地位に昇任したのも、中央軍事委員会主席習近平の信任と指示が少なからずあったからである。

習近平の”八不准（八つの禁止事項）”、禁酒令は、實際上許其亮が空軍司令であったときに行った改革のコピーである。言わば、許其亮の”治軍理念”が習近平によって”治国理念”に利用されたのである。

軍上層部の総入れ替え

習近平は、主席就任後2012年11月に中央軍事委員会委員の総入れ替えを行った。10名の軍事委員のうち8名が入れ替わった。また2013年7月下旬から8月上旬の短期間に6名を大将に抜擢し、そのほか18名を中將に昇任させた。抜擢した24名中、11名は政治将軍である。張又俠、劉源、劉亜洲の3将軍は、特に習近平と関係が深い。この3名は太子党（注：中国共産党高級幹部の子弟で人脈を利用できる特権階級）である。

今年は、北京軍区、蘭州軍区、成都軍区を主に、一部の軍区の高級将領が交代した。北京軍区は6名の将官が交代した。そのうち2名は、交代したばかりの副司令員であった。蘭州軍区は6名の将官が交代、成都軍区は7名の将官が交代した。それらのうち蘭州軍区の2名は副司令員であり、成都軍区では2名の新任副政治委員が含まれる。

中下層の大規模な人事異動が現在進行中である。2013年11月15日、成都軍区は、貴陽にて省軍区指導グループの人事異動発表会を開催した。同発表会の席上、成都軍区副政治委員王增鈺は、習近平主席が署名した中央軍事委員会命令を読み上げた。貴州省軍区司令員の李亜洲は四川省軍区司令員になった。王盛槐は昇任し貴州省軍区司令員になった。省委員会常務委員、省軍区政治委員の石曉が会議を主催した。四川省軍区司令員凌峰及び政治委員の葉萬勇は引退となった。南京軍区では、浙江省軍区副政治委員馬家利が江西省軍区政治委員となった。元江西省軍区政治委員の陶正明は引退となった。四川省は、周永康、薄熙来疑獄事件の中心地である。

武装警察隊の指揮官も人事異動があった。各省の武警総隊指揮官に大規模な人事異動があったほか、各省の武警部隊が軍の建制にならって改められ、総隊長を司令員とし、軍としての色彩を強化した。十八大前夜、中共は率先して海南省の武警総隊長を司令員に改めた。孫建峰が省級武警総隊の最初の司令員となった。その後、全国の省級武警総隊が逐次改められるであろう。このことは、武装警察隊の職能、級別、従属関係が改編され、或いは政法委員隷下から離脱し、中央軍事委員会直属となる可能性を示している。

三中全会終了後、中国軍と武警部隊の人事異動は頻繁で、8名の将領が引退、9名が交代した。次の最大の人事異動は武警系統であり、浙江省、黒竜江省、甘肅省、寧夏回族自治区、河北省等、5個省に及ぶ。

”新華社”の報道によると、今年1月29日、習近平は北京の武警を視察した。習近平の視察に同行したのは、例の軍事委員会副主席範長龍及び許其亮であった。二人は習近平に寄り添って部隊を視察した。習近平は、武警の指揮拘束権に関して新たな暗示を行った。すなわち武警全員を軍事委員会の指揮下に入れるという信号であり、彼は武警部隊に対する支配権を強化した。習近平は「軍事委員会の規律刷新強化に関する決定指示を徹底し、組織の集中統一を図れ」と述べた。

新たな軍内崇拜の動き

中国軍内の刊行物を熟読すると、次のことが分かる：習近平時代と胡錦濤時代では、文章宣伝工作上で大きな差が見られる。現在の軍隊内刊行物は一篇の文章中に何度も”習主席”の言葉が出てくる。胡錦濤や江澤民はほとんど忘れ去られた。しかも胡錦濤時代は、主要な軍の理論論文には必ず江澤民の名前が出

ていた。三中全会の期間に、機関紙解放軍報は、「党の軍に対する絶対指導を終始堅持せよ」と題する論文を掲載し、習主席が全軍党の建設工作会議で代表に接見した時の重要指示を真剣に学習し貫徹することを論じた。この論文の出現は、習近平の軍に対する支配、特に総政治部に対する支配がすでに確立したことを意味する、と KDR は考える。

以上